

ささえあう

2008年
12月15日
第8号

事務局 大分市大字森679-6 リフォーム夢舎内 TEL・FAX097-527-5443

いろんな仕事が見えてきた

「苦労した方は人にうんと優しくできるので、介護や高齢者支援の仕事には向いていると思う」、「草刈りなど地域から求められる仕事が増えている」、「来年には新しい事業所で障害者を採用したい」、「農業で自立を支援したい」…。

いろんな取り組みが県内各地で広がり、就労の可能性が広がってきています。

その一方で様々な課題も具体的に明らかになってきました。「統合失調症の人が1年以上継続して働いている。状況をよく見て、きつくな

また『施設に通うとまわりの目が怖い』と施設通所を拒む家族もいる」とくやしい気持ちがいっぱい施設の役員さん、「何とかしなければと思うけどどうすればいいのか。ノウハウが欲しい」と願う行政関係の方もいます。

「就労支援以前の生活支援」、「就労後のサポート体制」、「医師との連携」、「今ある制度の活用と改善」などが具体的な課題として明らかになってきました。

当事者にも支援者にもサポート

そのような課題に、ネットワークを活用して取り組むことによって何かが変わり始めていま

「1歩前進、2歩後退。 でも急に5歩進むことも！」

大分精神障害者就労推進ネットワーク 事務局長 安部綾子

ったら1週間くらい休むという感じでやれば、結構長くやっていけると実感している」。しかし、「支援や理解が得られないまま就労してしまつと、長続きせず病状を悪化させてしまうこともある」と医療関係の方が現実を指摘します。

支援の課題も明らかに

「わたしは80歳になったけど、まだ頑張らんとあ」と話された家族会のお母さんたちは今もがんばっています。また当事者ととも日々悩み苦しみながら誰にも言えず耐え忍んでいるお母さんもいます。その心の支え、息抜きの場はどこにあるのでしょうか。今のままでは、家庭から一歩踏み出そうとする当事者を本当は不安と心配が先に立ち、前向きに社会に送り出せないのではないかと思います

す。支援するなかででてきた「支援と甘やかすことの違いはどこにあるの」という問いかけについて、いろんな立場の人たちが一緒に考えました。そのなかから、事業所と支援機関や研究者などが連携して、就労する当事者だけでなく支援者に対してもサポートする取り組みが始まりました。

新たな道が見え始める

さまざまな人がつながって、直面した問題を持ち寄って、意見交換して情報を共有することによって、新たな道が見え始めるのです。

取り組みのなかから生まれてきた言葉があります。「1歩前進、2歩後退。でも急に5歩進むことも！」—これが私たちの実感です。あきらめず、希望を持って取り組み続けましょう。

「広げよう!就労の輪—地域からの報告」(2)

- コーディネーター 三城 大介(別府大学文学部人間関係学科准教授)
- 報告者 藤波 志郎(障がい者福祉サービス事業所ひので) 白石 一徳(生活訓練施設フライハイム)
神田 道子(有限会社オーシャン企画) 矢野由美子(LLCハートブリッジ) (敬称略)

制度・支援をどうつなぐか

三城 ここで、「企業応援団」や「委託訓練制度」など県の取り組みについてお話をいただきます。(内容は第7号8ページで紹介)

行政としていろんな制度があります。しかし調査をしてみると、実際には余り利用されていない、もしくはどう利用すればいいかわからないという状況が確認されています。企業では、「精神障がいの方をどう使えばいいかわからない」という数字が多く出てきました。

昨年、全国のてんかんの方々の調査にも関わりましたが、生活や就労の支援はほとんど自分の家族や知人によって継続されている方が非常に多いことが明らかになりました。いろんな制度につながっていないんですね。精神障がいの就労に関しては「制度につながっていない」というのが非常に大きな問題です。

それから「継続」という問題があります。「何人就労しました」「何人退院しました」という数値で計られがちですが、継続の数値化はなかなか難しい問題があります。

4人の方のお話のなかで、白石さんのお話には「ニーズ調査に基づいてつくった」というこ



とがありました。大分大学の椋野先生たちの地域の実態調査によって地域のニーズを把握して実施したことにより、精神障がい者の就労や社会参加だけでなく地域の活性化につながったというのはとても大きなヒントだと思います。

藤波さんが「安心・継続のサポート」を実施することによって、企業との信頼関係を築いてこられた。企業は「そこまでサポートしてくれるんかえ。それなら考えてもいいな」みたいな話になって企業の開拓ができていく。そこにも新たなカップリングが生まれているんですね。ただ事業主の善意に頼るのではないということが大切だと思います。

ニーズを把握して、何と何を組み合わせると何が生まれるか。今日お見えの首藤さんは農業と精神障がい者の就労をカップリングされてやってられていますね。

ここで、矢野さんにハートブリッジの支援の仕方について、ニーズの把握を含めて少し詳しくお話をいただきたいと思います。

専門家の力を借りる

矢野 いま精神障がいの方が4名の方がいらっしゃっています。あとご相談の方が何人かいらっしゃるのですが、病気の程度とか症状は様々です。まず、ドクターから病状や病歴を伺って、それをもとに看護計画を立てて、それをもとに就労支援計画を立てようということをやっています。もとの仕事が看護職で、医師の指示抜きで仕事をしたことがなかったので、それが就労の仕事でも生かしていると思います。自分たちだけの判断ではなく、いろんな専門家の力を借りて動くことが大切だと感じています。

ニーズの把握の仕方では、「何々ができない」

ではなく、「何々ができる」「何々をするためには何々が必要だ」と考える方法でやっています。この考え方は、就労支援には特にしっくり来る気がしています。

三城 矢野さんのところでは、例えば精神障がいの方が週に2回「犬の散歩」を担当していますね。私も当事者の方に会ったのですが、非常に生き生きと責任を持って仕事をしていますね。

ただ、事業として、経営として成り立つのかというのがとても大きな問題だと思います。精神障がい者の就労や生活の支援が、誰かの善意でしかできないのか、それとも企業家として、精神障がいの方を社会資源として事業の中に組み込んでいけるのかはとても大きな問題だと思うんですね。

また、毎年一般就労に送り込んでいくと施設の負担がどんどん増えてきますね。それで施設な成り立つんだろうかという大きな問題があります。それをどう乗り越えようとお考えでしょうか。神田さんと矢野さんに伺います。

困っている人のために

神田 企業としては採算があうようにしたいと考えています。私は障がい者の漬物工場が社会に出て行くのを4年間見てきました。やはり、特化した品物をつくっていかなければ、普通の漬物屋さんと競争はできません。これからは環境問題ですから、全部「エコ」です。雨水の活用、それから食の問題、無農薬、無添加ですね。地域を巻き込んでの運動にしたいと思っています。

矢野 経理のことは苦手なんです（笑い）、ケアのことで言えば、外国の人にも入ってもらわなければというくらい人材が足りなくて、仕事の割には単価も安いし、ヘルパーさんなども求人を出してもなかなか来ないというのが現状です。また、制度の改定でヘルパーができる仕事が狭まって、制度に乗らない大事な仕事も増えています。

障がいをお持ちの方で、ヘルパーの資格を持たない方には、制度に乗らない仕事の担当にな

っていただいています。犬の散歩とか、草取りとか、窓ふきなど、高齢者やハンディのある方が「お手伝いが必要だけど手伝ってもらえない」ということをしてもらっています。高齢者も、いまはお金を出してでも「困った時は手伝って欲しい」という方が増えていると思います。

苦労した方は人にうんと優しくできるので、病気のために得られたものを生かして働いていただいています。

三城 お二人の話を聞いていて、やはり「ニーズキャッチ」が大きなキーワードかなと思います。白石さん、精神障がい者への理解というのが一番大きな目的だったと思うんですが、何が変わりましたか。

当事者も地域も変わる

白石 まず利用者（当事者）の反省会ができるようになったことですね。いままで、田中町というところで販売を行ったことがあるんですが、朝の9時半から午後の2時半くらいまでの長い時間でした。それは田中町のニーズに合っていないですね。だらだらと商品が売れていく。長い時間、ものすごく大変だったんですね。だから、利用者（当事者）は「めんどくさい」「行きたくない」というのが本音で、意見が出てこなかったんです。ところが今回は20分、30分という短い時間で飛びように売れる。「やりがいがあります」「期待に応えたい」「もっとたくさん商品を作らなければ」などの感想が出てきました。

利用者が反省会で考えたのが、あいさつとかお客さんに対する言葉遣い、身なりを考えよう。レジを増やせばもっとスムーズに対応できるのではないかなどと、改めて反省会で言葉にしていました。

3回目には90歳の高齢の方がいらっしゃって、いっぱい買ったけど持って帰れない、「おばあちゃん、わしがもっていっちゃろうか」と言って家まで持って行ってあげた。コミュニケーションが生まれるようになった。願っていたのはそこなんですね。

利用者が地域の人とどうやったらコミュニケ



ーションが取れるんだらうか、と考えていたところが、本人たちが積極的にやり始めた。

地域の方の変化としては、ニーズがどんどん増えてくる。野菜だけではないんですね。荷物を運んでもらいたい、もっと他のものも持ってきてもらえないか、さらに小さなスーパーのようなものができないかということになっています。

それから予想外のことなんですが、地域の交流の場になっているということもあります。そこで「久しぶりやなあ、元気やったかい」と地域の人の会話が生まれて、席を設けるとそこで楽しそうに皆さん会話をされています。「今日は誰々さん来てないかえ」、「買って行ってあげようか」とか、というようなことがあります。

三城 一病院や一施設が担うことはオーバーワークにならないですか。

白石 スタッフでは自分たちができる範囲でやろうと話していますが、ニーズが広がれば一つの施設だけでは不可能だと思います。大分市内の他の施設等でもいろいろな農作物をつくっているので、そういうところにも声をかけて、事業者などの力も借りながら障がい者によって地域活性化ができないだらうかとも考えています。

企業にもサポートを

三城 藤波さん、就労に移行していくということで就労継続支援B型の事業所として取り組まれています。企業に就労者を出していく場合、当事者は3か月の壁、6か月、1年の壁に直面

すると思いますが、それを施設がサポートし続けていけるのでしょうか。施設の運営上問題はないのでしょうか。

藤波 3か月という区切りを言われましたが、まず1か月、次に2か月、そして3か月という目安を立てました。就労訓練をする中で、まず1か月の実習を行います。企業としても1か月はこれくらいの工賃でいきましょう、ということになります。「安い」と言われると、「これから技術も上がってくれば工賃も上がる」「3か月になればこれくらいになる」という話し合いの中でやっております。

施設としては、支援は続けていかなければならないと考えています。支援の仕方においても、就労した後も私たちの施設に必ず1週間に1回は寄るようにして、話を聞きます。

企業としては、今私たちのところから行っている2人は非常に仕事ができるということで喜ばれています。しかし、訓練をしている間には不安が出てきます。「これで自分はいいんだらうか」「こんなところでミスをした」、こんな不安はたくさん起きてくる問題だと思います。そういう不安をいかにして一緒に話し合いながら取り除いていくか。そしてそれを企業に話し、「こういう問題がありますから、こういうところは理解してください」、「こういう支援をお願いします」と伝える。こういう連携をきちっと取っていく必要があると思います。

私も、絶対働けるという自信ができてきています。悩んだり苦しんだりものすごくあります。しかしケアをしていく中で成長し、強くなってきています。企業もプラスになる、施設もプラスになる、そういう関係を持てる連携を持たねばと考えて取り組んでいます。

三城 施設が企業をサポートしていくということで、企業の受け入れは違いますか。

藤波 明らかに違います。昨日も訪問したばかりですが、これからいろんなところを訪問していきたいと思っています。

誰も損をしない=みんながよくなる

三城 もうひとつ、施設以外にどんな社会資源

があれば就労が進むと考えますか。

藤波 資源というのは「ニーズ」じゃないかなと思うんです。ニーズが資源になる、障がいの特性を生かして働くことができる“すき間産業”を探していくことが、私たちの大きな役割ではないかと思っています。最近、ある地区の方から「草刈りができるかえ」と言われました。うちの利用者に草刈りの専門家がいるんで、頼んだら「いいです…僕がやります」と言ってくれました。掃く人、刈る人と一緒に私も行きましたが、ばっちり仕事ができます。そういうものも作り出していく、探していく、そういうことも必要だと思っています。

三城 ある意味“錬金術”だと思いますね。マイナスとされている部分をプラスに変えたり、当たり前と思われていることを組み替えてみることで新たな資源が創出されたりします。そこから可能性が生まれたりします。地域のニーズを知るとということと、それを誰が組み替えていくのか、そこに企業がどう関わるのか。

障がいのある人たちが恩恵で生きていくというのではなく、地域の中で同じ仲間として、同じ人材として、“誰も損をしない”“みんながよくなる”というかたちを作っていくことを考えなければならないと思っています。



会場から

きっかけと創意工夫が必要

舛田 皆さんのお話を伺って、きっかけが大事だということと創意工夫が必要だということを感じました。福祉が地域おこしにつながるということを私も実感しています。ただ、最近トラ

イアル雇用に失敗した人に話を聞きました。雇用した社長も知っているの聞いてみると、分析が足りないんですね。風呂掃除の仕事の工程を分析すると160工程くらいあります。そこからどれくらい時間がかかるか、何人必要かがわかります。また差別化することで値段が上がってくる。これも大事だと思いました。

梅田 以前、障がい者のいる場所で働いていて、自分が知らないことが障がい者の障害になっているということに気づきました。知らないから働けないということと、知らないから働く場所を与えないという“地域性”があると感じました。今日、皆さんの活動を知り、知ることと知らせることが大切だと感じました。

時間はかかりますが

・家族のもので。働く場をつくる取り組みをいただいていることに大変感謝しています。矢野さんに質問ですが、先ほど4名の方が働いておられるとのことでしたが、在宅支援の仕事ということで犬の世話とか窓ふきとかされているそうですが、介護の仕事は人間対人間の仕事だし、介護は臨機応変の対応も必要になると思うのですが、障がい者が対応できるのだろうかというのが一つと、コミュニケーションをどうされているのですか。

矢野 介護の仕事なので、本人のケアが商品になるので、商品としてお客様に届けられるまでには時間がかかると思います。対人恐怖の方もいますが、ペアで行くなど工夫して、ストレスができるだけ少ない方法でやっています。

一人ひとりつながっていくことが大切

三城 こういう形で、一人ひとりがつながっていくことが大切だと思います。何がいい、何が悪いではなく、いろんなことをしている人がいて、それを多くの人が知り、連携していくことが重要だということですね。

(写真は太田市フライハイムの「朝市」と農作業の様子です)

私の職場 「あきらめずがんばらず」

HARU

苦しい症状が取れなくて

私は統合失調症になって、もう18年以上になります。18年にもなりますが、去年の4月に今の職場に出会うまでは、薬物療法をしていてもなかなか症状が取れることはありませんでした。

私の症状、それはとても苦しいものでした。自分が有名になっていて、あることないこと噂を流されているという妄想から始まって、マスコミなどがTVのブラウン管を通じて四六時中監視しているという注察妄想、自分の考えていることが周りに漏れているという感覚がどうしても取れない思考伝播、夜寝ている間に誰かが部屋に入って来て暴行されるという妄想(体感幻覚)などが主な症状でした。

これらの症状があるため、私の心はたえずリラックスできず、仮想の敵役を作って憎んで、一人心をすさませたりしていました。特に思考伝播の症状は苦しく、私はこの症状がひどくなると、他の人に伝わってはいけなことを考えないように、不自然に思考をコントロールしようとしていたりしていました。自分の考えていることを周囲の人が真似して言ったりする幻聴も聞こえ、私は自分の聴覚の何を信じていいかわからなくなったりもしました。

病気をオープンにして職場に

ずっとこれらの症状がありながらも働いてきましたが、仕事でも聞こえるのでとても苦しかったです。今の職場に出会うまで、ずっと病気のことは隠して働いてきました。

しかし、今の職場で病気をオープンにして働くようになってから、すこしずつ症状がよくなり、今ではほとんどない状態になりました。

今の職場ではまず社長と幹部の方が病院まで来てくださり施設などを見学して、病気に関する理解を深めてくれました。そして、4回の研修の後、社員の方たちの前で私の症状のことを話すセミナーを設けてくださいました。

後で聞いた話なのですが、このセミナーの後、社員の方たちがもっと理解を深めようと、アンケートを作ったり、お昼休みに精神の障害に関するピ

●今号から「私の職場」のコーナーを設けたいと思います。県内の職場で実際に働いている当事者の方に登場していただく欄です。今回は職場名は出さず名前は仮名にさせていただきました。

デオを観てくださったそうです。

そして入社してからは、就労支援の一環として相談役の方を一人つけてくださり、私は右も左もわからない会社の中で味方のように感じてとても心強かったです。会社の幹部の方や相談役の方は私の病院のスタッフとも連携を取り、月に一回定例会を開いているようです。

取れた“思考伝播”

最初は思考伝播の症状も取れなかったのですが、この相談役の方に何か自分の心が漏れる音を真似する声が聞こえても、「今、聞こえたんだけど…」と訊くことができ、それをその方も誠実に受け止めてその上で「心の声なんて漏れてませんよ」と言ってくれたので、じょじょにですが、職場の人たちのことを信頼できるようになりました。思考伝播はその場に適応できてないと出ることがあると聞いたことがあります。私はこの方に繰り返し訊くことによって、また理解ある温かい職場でじょじょに職場に馴染んで行くことによって、思考伝播がとれていったように思います。

またこの相談役以外の人とても優しく、「調子、どう？」と訊いてくれる人もいます。思考伝播以外の症状も同時期に病院で行ったカウンセリングで受け止めてもらえたのが良かったのか、今ではほとんどない状態になりました。

あきらめず、がんばらず

私は人に疲れてこの病気になったような気がしていますが、また人に癒されて病気がよくなった気がしています。ずっと薬物療法をしながら病気を隠して働いてきましたが、なかなかよくなりませんでした。病気になりたての頃は、人を憎んだり心をすさませがちでしたが、どんなにひどい妄想に脅かされても、自分に負けずに生きていけば、いい環境に出会えるんだなあと思います。私も今の恵まれた状況に甘んじず、自分磨きをしていきたいものです。そして後に続いてくる精神の障がい者の人たちの道を広げたいと思います。

みなさんあきらめず、がんばらず、いきましよう。

大分・1月31日 別府・2月20日 竹田・2月24日 「フォーラム」を開催します

昨年12月15日、別府市のビーコンプラザで県全域を対象に「精神障がい者就労推進フォーラム—支援があれば働ける」を開催しました。和歌山県の紀南就業・生活支援センター所長の北山守典さんを講師に「精神障がい者は働ける」ことに確信を持ち、そして「さまざまな支援の方法がある」ことを知ることができました。今年度は、地域の取り組みを進めるために県内3地区(大分・別府・竹田)で地区フォーラムを開催します。身近な地域のフォーラムにぜひご参加下さい。また、それぞれ内容の重点が異なりますので、複数のフォーラムにご参加いただくことでより幅広い情報やスキル(技術)を得ることができるものと考えています。ぜひご活用下さい。(以下敬称略)

●精神障がい者の地域生活と就労を考える大分フォーラム

- ・と き 1月31日(土) 13時～16時30分
- ・ところ アイネス(大分県消費生活・男女共同参画プラザ)
2階大会議室

大分市東春日町1番1号 **参加費無料**

- ・基調講演 「支援があれば働ける」—精神障がい者は働ける・
支援の重要性・地域・企業との関わり—
講師 別府大学文学部人間関係学科准教授 三城大介

- ・第1部 報告「私の仕事・私の地域」
—当事者の報告プラス取り組みの報告—
大分すみれ会・クロネコメール便 つわぶき園・弁当 LL
Cハートブリッジ・介護事業 フライハイム・朝市

- ・第2部 シンポジウム「ネットワークによる支援へ」
パネリスト 介護事業の現場から(LLCハートブリッジ・矢野由美子)・医療の現場から(河村クリニック・河村郁男)・デイケアの現場から(大分丘の上病院デイケア・古賀朋和)・生活訓練の現場から(フライハイム・白石一徳)
助言者 大分大学福祉科学研究センター講師 三輪まどか
コーディネーター 別府大学文学部人間関係学科准教授 三城大介
問い合わせ先 フライハイム(白石) 097-588-8616

と き 1月31日(土)
13時～16時30分
と ころ アイネス
大分県消費生活・男女共同参画プラザ
2階大会議室
大分市東春日町1番1号
097-588-8616



基調講演 「支援があれば働ける」
—精神障がい者は働ける・支援の重要性・地域・企業との関わり—
講師 別府大学文学部人間関係学科准教授 三城大介
第1部 報告「私の仕事・私の地域」
—当事者の報告・取り組みの報告—
大分すみれ会・クロネコメール便 つわぶき園・弁当 LL Cハートブリッジ・介護事業 フライハイム・朝市
第2部 シンポジウム「ネットワークによる支援へ」
—生活と就労の現場のあり方についてみんなで話し合います—
介護事業の現場から(LLCハートブリッジ・矢野由美子)・医療の現場から(河村クリニック・河村郁男)・
デイケアの現場から(大分丘の上病院デイケア・古賀朋和)・生活訓練の現場から(フライハイム・白石一徳)
助言者の報告を含みます(敬称略)

主催「精神障がい者の地域生活と就労を考える大分フォーラム」実行委員会
事務局 フライハイム(白石) TEL 097-588-8616
共催 大分県消費生活・男女共同参画センター(大分)・大分県福祉政策推進協議会

後援 大分市・大分県・大分県消費生活・男女共同参画センター・大分県福祉政策推進協議会・大分県社会福祉協議会・大分県障害者
就業センター・障害者就業・生活支援センター・大分県福祉政策推進協議会・大分県福祉政策推進協議会(敬称略)

●精神障がい者の雇用就労を支える別府フォーラム

- ・と き 平成21年2月20日(金) 13:30～16:30
- ・ところ ビーコンプラザ・中会議室
- ・基調講演 「精神障がい者を含む障がい者の就労支援について～市区町村の取組事例」
福岡市障がい者就労支援センター所長 黒田小夜子
- ・シンポジウム 「精神障がい者就労支援のプロセス～別府市における取り組み」
進行 別府大学文学部人間関係学科准教授 三城大介
・三菱商事太陽株式会社取締役 管理部長 山下達夫

- ・ 障害者地域生活支援センター 泉 施設長 渡邊喜美子
 - ・ 大分県厚生連鶴見病院 精神保健福祉士 三好陽子
 - ・ 社会福祉法人太陽の家ワーカビリティ事業部職業訓練課長 西山英樹
- 問い合わせ先 大分障害者職業センター 0977-25-9035

●精神障がい者の地域生活と就労を考える竹田フォーラム

- ・ と き 2月24日(火) 13時～16時
- ・ ところ 竹田市社会福祉センター
- ・ 基調講演「地域で暮らす地域で働く」
精神障がい者の地域生活と就労の課題と対応について、基本的な考え方を講演
講師 別府大学文学部人間関係学科准教授 三城大介
- ・ 地域の報告「いま地域では」
地域の施設、支援機関、企業、病院などの取り組みの現状を報告—当事者・家族、施設、支援機関、病院、企業、行政、ボランティア団体 等
- ・ シンポジウム「地域とのつながりの中で」
講演と報告を受け、地域でこれからどのように取り組んでいくかを話し合う—施設、病院、支援機関、企業、行政 等



昨年の「精神障がい者就労推進フォーラム」(別府市ビーコンプラザで)

編集後記

世界的な大不況の中で仕事を失う人が増えています。収入がなくなり食べていけないという人、寮を出されて住むところがないという人、仕事に就く前に内定を取り消されたという若い人たちもいます。仕事がないことのつらさがあらためてクローズアップされました●その一方で「健常者ですら仕事がないのだから、まして障がい者には仕事は回ってこない」という声も聞かれます。事実、事業所や作業所への下請けの仕事は大幅に減ってきています。また、企業に就労したいと思って探してみても簡単には見つからないでしょう●「でも」と私たちは考えます。ここが終わりではないはず。むしろ仕事＝就労について考えるチャンスではないでしょうか。仕事を失った人たちが感じている「仕事を絶たれると生きていけない」という気持と現実、私たちに、生きる上での仕事の意味を実感を持って伝えてくれます●「障がい者は年金をもらっているから」と思われるかも知れません。しかし年金をもらっている人も月に6万円から8万円程度です。それだけでは到底暮らしていきません。多くの人が仕事をして収入を得たいと願っています。働くことの意義は収入だけではありません。社会に関わり、いろいろな人たちと関わり、人の中で日常生活を送っていくための基礎に他ならないのだと思います。「障がいがあってもなくても仕事を、そして安心して暮らせる地域を」という願いは、ますます切実になってきています。●今年度取り組んでいる3地区での「フォーラム」では、いろんな「働く」を目の当たりにすることができるでしょう。厳しい現実だけでなく、地域で「生きる・働く」可能性も見せてくれるでしょう。地域にはそれだけの積み上げができ始めています●「苦労した方は人にうんと優しくできるので、介護や高齢者支援の仕事には向いていると思う」、「1歩前進、2歩後退。でも急に5歩進むことも！」—精神障がい者が働く現場から、こんな言葉が生まれ始めているのですから。(〇)